

あを 5  
2019



風鈴に八十路の憂しき齒痛かな  
若竹の枝葉に鶉の重さかな  
青柿を見て見ぬふりの鴉かな



絵と俳句・関合正昭

# あそ

五月



須賀忠男

牡丹雪

東京 佐藤 喜孝

地球に足をのせてゐるはず夕長し

ニッポンニホンヤポンジパンダさくら餅

拭きこみし漆のうへに牡丹雪

海よりもたひらに妻のよこたはる

沈丁の花のうら側色異に



埼玉

大日向幸江

草餅

改元を待ちきれずして花見客  
出汁醤油アサリ生姜や深川飯  
春障子四角に開ける猫の道  
入園す小犬のワルツ踊るごと  
草餅や女系家族の続きたり

東京

七郎衛門吉保

花見

コンチエルト花と線路と沿ふ川と  
沿ふ川を半襟にして花の帯  
葱坊主背伸びして見る花の土手  
花冷えや川遊びの子なく魚の影  
B級グルメの屋台と並ぶ花篝

東京

篠田 純子

平河天神

撫牛は耳も尾も溶け百千鳥  
石牛の金の鈴鳴り枝垂梅  
ものの芽や角ハイボール濃いめに  
其処彼処に多言語の人花見山  
魚の影春の日ざしの柳瀬川

石川

定梶じょう

受難節

入学試験黄金になれ触るるもの  
焼跡の土間のさびしら春の雪  
廃村に残れる一寺磴遅日  
まごの手をつかふ心中西行忌  
消火器のしょへるは柱受難節



東京

須賀 敏子

春炬燵

折鶴の角きつちりと卒園す  
リフォームの終はりし家や辛夷咲く  
金平糖の角つんつんや雛まつり  
白髪に銀のピンさす春あした  
何だかな何も無い日の春炬燵

東京

田中 藤穂

角貝

角貝も土産に加へ春の島  
壁に仰ぐトナカイの角春寒し  
雨戸繰る今朝ほころびし花杏  
紅椿テロのニュースが飛び込んで  
立止まる生協で売る種袋

三重

長崎 桂子

雛祭

曇天の薫りの渦の梅見かな  
お喋りと笑ふ少女等スイトピー  
慎みて撒饌いただくうららかや  
吊し雛人の動きと平行に  
古りし雛歪むこと無き調度品

東京

森 なほ子

三月

鳥曇入江は小さき漁港抱き  
雛の日は苺のケーキ二人分  
紙箱のしつとり重く桜餅  
角砂糖紅茶に沈め春浅し  
パンジーや台車を付けし犬はしゃぐ



椿の島

東京

赤座典子

「天の川」八重に咲きたる白椿  
朧夜や御神火太鼓の乱れ打ち  
明日葉の苗を抱へて連絡船  
春の雨をはらはぬうちの薄日差  
木の芽風昨日のままのプラレール

埼玉

秋川泉

桜餅

日脚伸び各駅停車のひとり旅  
コンクリの割れ目割れ目にすみれ草  
病む人の明かりもれくる雛の宵  
三毛猫の夜会があるや朧月  
村人のつどひの席の桜餅

東京

佐藤恭子

花の闇

青葉冷林不忘の本に入る  
象の皺カバの皮膚見て夏の風邪  
たまさかたまさかのあはひ花の闇  
伽羅の香の流れ来るよな春の風  
右足を出してたしかむ恋の猫



蜷蝶光のかげにみえかくれ 佐藤喜孝

春キヤベツ丸丸煮込みご馳走に 石森理和

頭煮の鯛の骨までしやぶる男 大日向幸江

コンビニと我が家比べるおでん鍋 七郎衛門吉保

ちよんちよこぴいのふくら雀の弾みをり 篠田純子

警蹕の声か立春星走る 定梶じょう

春の風邪髪が何ともまとまらず 須賀敏子



エイマ

木の枝のほのかなる艶寒明くる 田中藤穂

睦月下旬明けの西窓白い月 長崎桂子

如月や霽れきらぬまま暮るる空 森なほ子

春の凧飛行機雲のほしいまま 赤座典子

寒満月ぬぬっと出し橋の上 秋川 泉

昭和の日みめうるはしき燕見し 佐藤恭子

喜孝抄



咲月

ひからない星もあまたに初まあり

佐藤 喜孝

俳句を始めて「擬人法」を知識として知りました。明治神宮や川崎大師に見られる、何万何十万人の初まありを、上五中七に擬人化したのではと読みました。世の中、ひかる星は極々僅か、この宇宙には、何十億何百億個のひからない星、があるとのこと、人の世もまた同じと実感。私もあまたの一人として、地元の日枝神社への初詣をしました。(吉保)

あればぬたでぬねばぬないで湯豆腐に

佐藤 喜孝

湯豆腐鍋という一品が、大勢の時にもそうでない時にでも丁度いい、というか恰好が付く。上五と中七の、剽軽ともいえるリズムミカルな響きで、季語があっさりと言われました。

それでも 久保田万太郎の「湯豆腐やいのちのはてのうすあかり」に、思いを馳せてしまいました。(典子)

大寒や鶴折る指が痛みをり

秋川 泉

あを二月号の作品に、輝と轍の二句を投稿しました。栄養や衛生事情が良くなった今日、この二

つとは縁が切れましたが、何かと貧しかった子供時は、大寒の頃になると縁の切れなかつたことを思い出します。作者は鶴に、ある願いを込めて折り込んでいるように見えます。その願いの行く末を案じて、輝やしもやけとかではない、指の痛みを感じながらの折鶴とみました。(吉保)

正月の微細な埃射光かな

石森 理和

ひびの入った壁や、傾いでいた昔の木造家屋では、その隙間をつくる射光は、幻灯写真の光源のごとく明瞭でした。今は大型でサッシの隙間のない窓になり、射光を見る機会が減っているように思います。しかし作者は射光を見つけました。もしかするとカーテンの隙間からかもしれません。上五中七の埃の表現が秀逸、埃がきらきらと舞う様が目に浮かびます。(吉保)

きんとんの照りはなやかにお正月

大日向幸江

おせち料理のお重は、彩が美しく、いつも何から頂くか迷います。きんとんだけを、山ほど食べたいと、息子が言ったこともありました。水飴を練りこんできらきらしている存在感にはつい引き寄せられてしまいます。(典子)

光の字書初展の勢揃

七郎衛門吉保

学校単位・地域単位・企業主催と小中学生の書き初め展は盛んである。今年のお歌会の御題「光」が書き初め展でもテーマになったやうだ。個性溢れる「光」が勢揃い。墨の香も漂ふやうで新春の

気横溢の空間である。同じ字が勢揃ひと鑑賞したので、「書初展の」を「書初展に」。(喜孝)

×張のあとは羊羹女正月 篠田 純子

新潟産の日本酒「×張」、下戸に近い私でも越後湯沢町のすし屋などに出向くときは、×張か鶴齡それも冷酒で。女正月にはもってこいのお酒でしょう。清瀬吟行の折に、作者はワインを持参され、参加者に振る舞われておられました。多分、下戸とは縁遠い作者なのではと推測しています。そして終いは羊羹、辛党も甘党も交えて、いよいよ盛り上がる女正月が見えます。(吉保)

貧しいは貧しいけれど初日の出 定梶 じょう

「貧乏」とか「貧しい」を詠んだ句は、リアルになるのを嫌うのか、最近は少ないのではという印象を持っています。そこでネットで調べてみました。子規はもとより八一・万太郎をはじめ、名だたる多くの俳人が読んでいました。そこには貧しさを達観し、楽しむようとしているように思えます。彼らの先達は一茶だろうか。作者の句はそれに近いという印象を持ちました。(吉保)

切干や風と光を味方とし 須賀 敏子

自家製の切干大根は、甘みも歯ごたえも、格段にいいと聞いたことがあります。色々と器用にお作りになる敏子さんの切干も、風と光を味方につけて、一段と風味を増していることでしょう。こ

のような句も作られて、本当に素晴らしい！(典子)

二天門 今日満開の冬桜 田中 藤穂

仁王像が安置されている二天門。その近くの冬桜は今まさに満開です。仁王様の恐ろしい風貌と、満開でも可憐な冬桜。その取り合わせを、一幅の絵のように詠まれました。外国の人にも、喜ばれそうですね。(典子)

冬の柿 一口に切る午後三時 長崎 桂子

柿は秋の季語、それを冬の柿とした作者。私が思い浮かべる冬の柿と云えば干柿、しかしこれも秋の季語。母方の故郷である甲州の、百刃目柿を干した枯露柿は、我が家の正月に欠くことのできない必需品。これは正しく秋でなく冬の柿です。作者はどんな柿を食べているのか。生の柿も枯露柿も頬張って食べるといふ感じではありません。一口大に切って冬のお三時です。(吉保)

幼子の声張り上ぐる初芝居 森 なほ子

歌舞伎の世界では、子役たちが襲名、御披露目、初舞台と、次々とニュースになっています。小さいながらも立派な装束を身に着け、しっかりと声を張って台詞を言う様子は、ほほえましく健気さをも感じさせます。歌舞伎ファンの拡大に、大いに貢献することでしょう。(典子)

ほろよひの伯父さん初めて読むかるた

赤座 典子

わが家族もこどものころ、歌留多取りを愉しんだ。意味も分からぬのに「乙女の姿」に心ときめかせたもの。新年の集まりの時、伯父さんは酔はなければいけない。しかめつ面では新年の雰囲気壊す。大人が酔ふのを子供なりに愉しむ。掲句の伯父さんは読手が初めてらしい。旧仮名に戸惑ひながら読まれたのではなからうか。それにしても楽しさうなざわめきが聞こえて来た。素晴らしい新年の親族会である。(喜孝)

## 道

石森 理和

月二、三回新橋へ出掛けます。＼ウコン＼の生ジュースを飲むためです。このジュースのおかげでここ三年風邪を引かずに済んでいます。何故だかはわかりませんが、私には合っているのか助かっています。人の行き交う賑やかな街ですが、目指すは＼SL広場＼です。機関車が迫力を持って飛び込んできます。健康を維持するため今の私には大切な新橋までの道です。



## 槍への径

須賀敏子



五十才の夏、女性四人で北アルプス槍ヶ岳から穂高連峰四泊五日の縦走を計画した。二日目槍岳山荘に着いたときは高山病で夕食も満足に摂れず寝たが翌朝は元気に。槍の頂上へ登り、北穂の小屋を目指す途中男性に次々と追い越された。ハシゴクサリの大キレットを下りそして飛驒泣きの登り足が重い。やっとの思いで小屋に到着すると男性達が拍手で迎えてくれた。

## 道

田中 藤穂

わが家の近くに十七本の桜並木があり根元が円く土が出ていて、そこを通ると土の香りを感じる。緑の雑草が生えていたりすると春の近づきを感じたりもする。道路がどこもかもアスファルトで固められてから膝の痛い人が増えたように思う。泥濘や土埃など減ってプラスの面も確かにあるけれども、もう少し足にも心にも優しい土の道が欲しいなあと思は思うのですが……



## 定梶じょう

赤座 典子

春昼やミロの画集のあるカフェ

真贋はともかくカフェに画額が掛けてあるなら平凡な景。画集だから詩になった。のどろかなひと時。

跳び縄の電車ごっこや母子草

「母子草」がよく効いています。

春愁消ゆ辻井伸行「きらきら星」

私もテレビでしたか、で聞いたことがあります。どちらかと言えばごつい弾きよりのピアノリスト、だと思ってましたが、久しぶりに聞いたらそうじゃなく

なっていた。私個人の思いでは「消ゆ」が不要では、と。〈春愁や辻井伸行「きらきら星」〉。

大日向幸江

紋白蝶群れなし飛びぬ浄水場

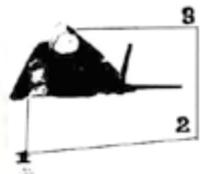
白蝶黄蝶の類はふしぎと水の上を好むようです。浄水場で、中七「群れなし飛びぬ」に説明臭があると思うのです。せめて「飛びぬ」を省略したい。〈群れなして紋白蝶や浄水場〉。

門外不出 図書館にある春挨

このままですと「春挨」が門外不出ととられかねない。 〔門外不出の図書館にある春挨〕。

アガサクリステイ読み終り山笑ふ

カタカナ語は本来、定型に乗せ難いのですがしかし、これからはいつそう遣わざるを得なくなるでしょうからそんなこと言ってられない。〔アガサクリス



テイ読み終りたり山笑ふ。

七郎齋吉保

四つ足も遊んでみだし残る雪

詩歌はどこかに謎のあった方が面白いわけですけど、掲句、いま一つ分らない。同じことは

残る雪オセロ終りて畦の土

もそうですね。雪と、雪解の畦の上をオセロの黒白に見立ててそれが終わった、残雪が解け終った、ということなんでしょうか。

π<sup>パイ</sup>の日やホワイトデーの狂詩曲

「ホワイトデーの狂詩曲」は何となく分りますが「πの日」が不明。役に立たなくて申しわけない。

秋川 泉

草野球ボール追ひつつ彼岸入

いつ頃のことでしたらう。「彼岸に入る」「入り彼岸」「彼岸入り」、どれも遣える季語だとする人と、いいや「彼岸入」の使用例はない、とする人があって、言い争いになったことがあります。どうなったかはつきりした記憶がないのですが、要するに歳時記の掲載することば以外は遣っちゃいけない、とする人がある、ということ。『彼岸の入』の「の」がとれてしまうのはよくあることなのですが。

さて泉さんの句に戻って、「ボール追ひつつ」。野球でボールを追いつつ、は平凡そのもの。こんな時は写生すればいいと思うのです。〈草野球ボール真つ白彼岸入〉。「真つ白」がやっぱり平凡？

杉の花房もつたり重き昼日中

「昼日中」がうまい。しかし「もつたり重き」で雄花であること分りますから、「花房」<sup>⑧</sup>とまで言わなくとも。〈杉の花もつたり重き昼日中〉。

春嵐郵便ポスト在りし跡

私もポストの句が大好きで、かつて「ポストの有りしなり」と措いたら「有るのかなのか」と質問されたことがあります。なるほど有るのなら「有りにけり」、ないのなら「むかし有り」とでも措かなくては、ということでしょうか。掲句、「在りし跡」です。今はないわけですが、読み手にはどんな跡なのか分らない。せめて〈春嵐郵便ポスト立ちし跡〉とした方が親切ではないでしょうか。

長崎 桂子

山笑ふ裾野も野路も若みどり

「山笑ふ」も「若みどり」も強い季語。〈山高み裾野も野路も若みどり〉。

参道の坂は難儀の彼岸かな

文法上「坂は難儀の」としても間違いではありませんが、「坂に難儀の」と措く方がことばの続きようが素直になると思います。〈参道の坂に難儀の彼岸かな〉。

岸かな。

沈丁の香り漂ふ墓の道

沈丁花を詠むに「香り漂ふ」は凡。「墓の道」を活かすべき。〈墓の道沈丁花香り来たれり〉。単純な定型を避けて句またがりに。

篠田 純子

号外を取りあひ喧嘩四月馬鹿

「喧嘩」とまでは言わない方が。〈号外を取りあひにけり四月馬鹿〉。

くしゃくしゃの元号伸ばす四月馬鹿

このくらい省略飛躍してても、あるいは「号外を取りあひ」の句がなくてもよく分って面白い。

角々の矢印どほり花見山

面白いですねエ。都会の花見にはこういうことがあるわけです。いなかでは案内の矢印なんて見たくともありません。

須賀 敏子

楠の強く剪定空広し

「強く剪定」が佳良。「空広し」は敏子さんの実感。

飛行機の低く飛びけり春夕焼

「低く飛ぶ」に説明臭。〈飛行機のおんなに低し春夕焼〉。

つくしんぼ見るだけの人摘む人

土筆を「つまむ」とは余り言わないと思いますが。〈摘む人と見るだけの人つくしんぼ〉。

森 なほ子

春寒しアンドロイドが無常説く

ある辞典に「無常」とは、人の命のはかないこと、と解いてあります。いわゆる人造人間が無常を説くわけで、アイロニーも窮まれり。春なお寒いわけです。

対岸のタワーマンション春灯

しつかりした句です。

きさらぎの名ゆゑ二月を愛しけり

多分近年、私の鑑賞した句中もつともいい句。羨望、瞻望。



民生委員地元の桜ほころぶと

「民生委員」の語が実に働いていますね。だから「地元」のことばも効いている。むかし「風土俳句」なる用語がありました。当にそれ。藤穂さん、金沢で歌誌を主宰した芦田高子の弟子でしたから、そんな影響があるいは。

平成も終る大きな春の月

「も」はどちらかと言えば好まれない助詞なんですけど、この場合はさほど重く感じない。でもやっぱりへ平成が終る大きな春の月へ。

リアス線開通春の海輝く

「リアス式海岸」が正則なんだろうが、そんな海岸を走る鉄道路線が開通した、と。で、「春の海輝く」と続くわけですけど、めりはりを付けたい。へリアス線開通春は海輝くへ。

すぐに来る動物園の春の蠅

失礼ながら喜孝さんのお句にしては普通の出来。「すぐに来る」が一因ではないでしょうか。

春の坂行って戻って坂の上

「行って戻って」は、「いろは坂」のような処を推しはかれば宜しいんですけどね。で、ついに坂の頂上に辿り、ついた、と。軽く汗ぐんで。

蝶々のいち日川の向ふがは

蝶々は・こちらがわにはついに来てくれなかったのですね。



橋

長者橋鴨二羽お達者桔梗橋  
橋爪にふと立ちどまる雪女  
厳めしき橋桁に添ふ春の潮  
艦橋の海図や南風がなぶりに来  
今朝も又金門橋は霧の中  
外堀から聖橋へと秋の声  
石の橋わたりて鴨をおどろかす  
春霞レゴ遊びめくループ橋  
あめんぼに石のちいさな太鼓橋  
軽トラツク行く新緑の業平橋  
蟻屍蟻引き渡る蟻の橋  
夏帽子今日一日を日本橋  
台風がドレミファ橋を流しけり  
それぞれに橋の點りぬすがれ蟲  
つづれさせあひおひばしはふたつ橋  
春寒の石橋反りて書院跡  
太鼓橋赤く塗りたて梅まつり  
人おもふ面影橋の白鷺に  
虹の橋空にかかるは太古より  
明石海峡跨ぐ大橋水澄めり  
初雪の根雪となりて橋の上  
舞殿へ朱の橋渡る青葉風

藤野 寿子  
佐藤 恭子  
赤座 典子  
定梶じょう  
須賀 敏子  
篠田 純子  
竹内 弘子  
石森 理和  
佐藤 喜孝  
田中 藤穂  
石森 理和  
須賀 敏子  
須賀 敏子  
佐藤 喜孝  
田中 藤穂  
大日向幸江  
佐藤 喜孝  
早崎 泰江  
斉藤 裕子  
大日向幸江  
田中 藤穂

橋十二くぐる舟より七変化  
初蝶の危なつかしくも橋の上  
虹立つや日照雨に濡るゝ眼鏡橋  
佃から八丁堀へ虹の橋  
秋風や両国橋まではね太鼓  
江の島へゆく橋長し夏の雲  
橋に寝て星座あれこれ薄暑かな  
春の風邪橋を仰いでみるやうな  
箱庭の橋をわたりぬ手をつなぎ  
袂などほしくなりたり橋すゝみ  
浮橋の大ききはむ欠氷  
吊橋のつなぐものとて蟬の山  
名月や橋を渡ると橋消ゆる  
橋桁に犬の放尿梅雨兆し  
島結ぶ白き橋よりサンセット  
さはさはと楓若葉や橋の午  
橋脚に絡まる夏の塵芥  
河番付橋番付や浮寝鳥  
沈下橋元に戻りて冬麗  
鉄橋の月に臍あり終電車  
葉桜や新富橋の喫煙所  
百合の木の実の落ちてゐる橋の上  
万世橋より電車あれこれ天高し

須賀 敏子  
大日向幸江  
井上 石動  
篠田 純子  
篠田 純子  
田中 藤穂  
須賀 敏子  
佐藤 喜孝  
佐藤 喜孝  
佐藤 喜孝  
佐藤 喜孝  
佐藤 喜孝  
佐藤 喜孝  
井上 石動  
佐藤 喜孝  
森 なほ子  
須賀 敏子  
秋川 泉  
須賀 敏子  
田中 藤穂  
篠田 純子

橋ふたつ渡りし先やおかめ市  
端

初鴉夢の片端きりとらる  
子雀のひとり歩きや道の端  
草刈機蛇も刈られし道の端  
障子開けそこは端近夜の秋  
上り端笹の通草に迎へられ  
福寿草目の端にあり稿急ぐ  
置かれぬしホームの端に寒小菊  
幸せを端切れに込めて吊し雛  
古利根の端に弟を置きし春  
道端の主婦の饒舌栗の花  
端近く指藍に染め浴衣縫ふ  
寝入端くさめに枕直しけり  
春遅し駅舎は村の囲炉裏端  
さくさくと氷白玉池の端  
菜箸の両端つかふ木の芽雨  
夕虹の端に目をやる麒麟かな  
ひとり居の寝端をおそふ火事喧嘩  
山の端の黍色の月暮早し  
十二月経木の端を紐に裂き  
椿山荘の端の緑蔭蕎麦処  
虹の端のもとへ近づく松葉杖

秋川 泉  
佐藤 恭子  
河合 笑子  
石森 理和  
芝 尚子  
芝 尚子  
栢森 定男  
佐藤 喜孝  
石森 理和  
赤座 典子  
渡邊 友七  
松本 米子  
芝 尚子  
石森 理和  
石森 理和  
芝 尚子  
芝 尚子  
竹内 弘子  
佐藤 恭子  
赤座 典子  
佐藤 喜孝  
赤座 典子  
佐藤 恭子

彦根城堀端秋の闇深し  
十五夜の平野その端貨車進む  
残菊の不揃ひがよし庭の端  
午后三時障子の端より出て行かれ  
長湯せり時雨が軒端つたふ夜  
冬の草柢遠まく端にゐて  
冬日中ホームの端の男の輪  
初雀軒端くぐりて啼き寄れる  
入端の煎茶の香り春の宵  
川端の若き桜の氣を貰ふ  
谷町のかつて田端にうらけし  
道端の手押しポンプや石路の花  
軒端から雨がこぼるる爪紅  
囲碁将棋中途半端に覚ゆ春  
囲碁将棋煙管繕ひ囲炉裏端  
おほらかに昼酌み交はす囲炉裏端  
流燈と大川端のビルともる  
八月の端を歩きてとしよりは  
ひっそりと秋の睡蓮池の端に  
山を出て海にうかみし白端書  
端近で體をひねる錦玉羹  
切り株の太き端より芽の出でし  
花リンゴ端から端へと猫の道

芝 尚子  
定梶じょう  
芝 尚子  
石森 理和  
定梶じょう  
定梶じょう  
鎌倉喜久恵  
渡邊 友七  
芝 尚子  
森山のりこ  
篠田 純子  
須賀 敏子  
佐藤 恭子  
佐藤 恭子  
石森 理和  
長崎 桂子  
佐藤 喜孝  
佐藤 喜孝  
須賀 敏子  
佐藤 喜孝  
石森 理和  
大日向幸江



れはもつと短い。

遅き日のつもりで遠きむかしかな 蕪村

定梶じょう

俳句の鑑賞文を書くころとする時どうしても枝葉に渡ってしまいがち。このことは私だけではないと思いますけど、今はともかく虚子と誓子の鑑賞文をとり上げてみます。

齡今他なく吾れなし炉に即す 岩木 郷燭

作者は、正岡子規死亡の翌年に虚子の門下になっているそうで、一門の長老。虚子の鑑賞は、「年をとった、他人とか自分とかいふこともなくなった。ただ炉に寄って暖をとる、それが今の吾れである」。

さすがに一呼吸違う鑑賞文です。そして誓子のそ

佐藤 喜孝

『青写真』を出してから大分経った。お金もないのに妻が都合してくれた。その折りは身に余るお礼状をいただいた。だが苦勞した目次のこと誰も触れなかった。

もくじ

序／瀧 春一

谷の章

河の章

名の章

家の章

里の章

喜孝さんのこと／高島 茂

あとがき

「懐旧」の前書きがありますが、誓子は「春の永日がつもりつもって遠い昔になっている」。なるほど強調して「つもりつもって」とすればいいわけですね。

だから、勉強になりました、とはいかないのが文章なのですが、ある『名歌名句事典』には「日脚が延びて日が暮れるのが遅い春の一日、うつらうつらと思いにふけっている。こういう日がいくつもつもり重なって、昔は夢幻の遠い彼方になったことだ」。俳人だけが読む誓子評だから。一般人も読む名句事典だから。それで評がこんな差になってしまったのでしょうか。そうではない筈です。

「谷・河・名・家・里」に「やかなけり」を隠し

たつもり。そして「谷河を家と名ずく」と無理があるが読んでもらえたらと遊んだが先にも書いた結果に終わってしまった。谷の章は無季。以下春夏秋冬で分けた。

七郎衛門吉保さんが難しいテーマを題材に挑戦してゐる。『青写真』から自解をすこし書いてみたくなった。

### 落花生 内者富良富良外者須夫須夫

この句を作った頃『古事記』が好きで俳句に語彙をいくつか引用した。この句も根の堅州国の項、大穴牟遲神が須佐之男命に放った鏑矢を取ってくるやうに云はれ野に入った。須佐之男命はそこで火を放ち野を焼き廻った。大穴牟遲神が困つてゐるところに鼠が現れて「内はほらほら外はすぶすぶ」といひ穴の中へ案内した。火は穴の上を通りすぎ鼠が鏑矢

を啜えてきて献じた。といふやうな話。書き言葉がない時代からほらほらすぶすとオノマトペを日本人が使っていることに驚いた。

落花生が煎られるときも「内はほらほら外はすぶすぶ」状態。一つはそんなことをおもしろがった句。

一九七六年二月に始まったロッキード事件。田中角栄・小佐野賢治・児玉誉士夫となつかしい(?)名前が新聞紙上などを賑はした。ピーナッツもその時の流行語。誰が「内」で誰が「中」か今以て判然としない。

あの頃はあゝでない、かうでもないと変な句を作ってゐたものだ。瀧春一先生にも、そして後年八田木枯さんにも「おまえの句は解らない」と言はれたことがうれしく、懐かしい。この句なども解らない句であらうし、解っても詮ない句だ。

## あとがき

四月号に同封致しました投句用紙印刷ミスがありました。申し訳ございません。破棄して下さい。

定権じょうさんのご協力で「あを」も大分発行の遅れを取り戻してきました。(喜孝)

二〇一九年五月号

発行日 五月十二日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

カット/須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

竹僊房

樽本咲月

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)